

2021年10月31日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

エゼキエル書 34 : 11～16、ルカによる福音書 19 : 1～10
「今日、救いがこの家に」

<よく知られた物語>

今日の聖書は、有名なザアカイの物語です。教会学校があるところでは、子どもたちによく好んで語られます。背の小さなおじさんが、イエスさまを一目見たいと、一所懸命いちじく桑の木に登る様子が、なんだかコミカルだからでしょうか。

でも、このザアカイに起こったことは、とても大きな慰めと励ましに満ちた出来事です。イエスさまはこれまで、神の国、神さまの救いが、どのような者に、どのようにして与えられるのかを教えて来られました。今日のザアカイの物語は、それが実際、このように実現しました、という出来事なのです。

そして、これはわたしたちにも当て嵌まる出来事なのです。

<徴税人ザアカイ>

さて、ザアカイの物語を見ていきましょう。1節には、「イエスはエリコに入り、町を通っておられた」とあります。

イエスさまは、エルサレムの町へ向かって、弟子たちと共に旅をしておられる最中です。その目的は、エルサレムで十字架に架かって死に、すべての人の罪をご自分の命によって贖うためです。そして、三日目に甦り、すべての人を滅びの死から救い出して、永遠の命を与えるためです。これは、旧約聖書の時代から約束された、神さまの救いのご計画です。この救いの実現のために、神の御子イエスさまは遣わされ、まさに今、十字架の死に向かって、エルサレムへの旅を続けておられるのです。

前回の聖書箇所、イエスさまは、いよいよエルサレムの近くの町、エリコまでたどり着きました。そして、エリコの町の入り口では、一人の盲人がイエスさまに救いを求め、見えない目を開いていただき、イエスさまに従う者になった、という出来事が起こりました。

それから一行は、いよいよエリコの町に入ったのです。

さて、その町にザアカイという人がいました。まず、彼はユダヤ人です。そして彼は、「徴税人の頭で、金持ちであった」と語られています。

これが何を意味するか。それは、救いから最もかけ離れた人物である、ということです。

「徴税人」は、これまでも何度か出て来ましたが、当時の時の勢力であったローマ帝国から委託を受けて、ユダヤ人の同胞から税金を取り立てる仕事です。

つまり、ザアカイはユダヤ人でありながら、異教の神を拝むローマ帝国の手先となってい

る、裏切り者のような存在なのです。そのため、ユダヤ人は「徴税人」という職業を忌み嫌い、徴税人を、異邦人に与する罪人、汚れた者、として扱っていました。

さらに、ザアカイは「金持ちであった」とあります。以前に、18章24、25節でイエスさまはこう仰いました。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」

つまり、神の国に入るのが困難な人として、「金持ち」をあげておられたのです。それは、単にお金を持っていることが悪いという意味ではありません。神さま以外に、頼るもの、大切なものを抱え持ち、手放せなくなっている、ということです。

ザアカイは、徴税人の頭。しかも、金持ちという、救われない条件を二重に満たした、徹底的に救いから遠い人物として、ここに紹介されているのです。

<ザアカイの孤独>

さて3節には、そのザアカイが、「イエスがどんな人か見ようとした」とあります。

イエスさまの力強い神の国の教えや、驚くべき病の癒しの業、数々の奇跡は、各地で伝えられ、彼もその噂を聞いていたはずです。人々の間には、神さまが約束なさったメシアかも知れない。イスラエルを復興なさる王かも知れない。そんな期待もあります。

しかし、何よりもザアカイが関心を持ったのは、イエスさまが徴税人を招き、罪人と食事を共になさる方である、というところではないでしょうか。

ルカ福音書の5章27節以下には、徴税人のレビという人がイエスさまに声をかけられ、イエスさまに従う者となり、徴税人の仲間たちと宴会をした、という出来事が記されています。これは、徴税人たちの間で、大変な話題になったはずです。

罪人とされる徴税人に、ご自分から声をかけて弟子にするような、酔狂な方がおられる。自分も罪人の仲間と思われてしまうのに、そんなことは構わず、罪人を招いて一緒に親しく食事をなさる。それは一体、どんな人なのか。とても興味があつたに違いありません。

また、そのようにザアカイが、徴税人、罪人と親しく交わるイエスさまに関心を持ったのは、一方で彼が、普段、人々との交わりから遠ざけられているからではないでしょうか。

3節には「イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見ることができなかった」とあります。

ザアカイが、この時イエスさまを見ることが出来なかったのは、単に背が低かったからではありません。イエスさまをザアカイから遮ったのは、ザアカイを妨げたのは、群衆だったのです。周りの人々だったのです。彼がイエスさまを見たがっているのを知りながら、立ちはだかった。誰も、前の方に行かせてくれたり、場所を譲ってくれたりしなかった。ザアカイに親切にしたい人は誰もいなかったし、親しい関係の人もいなかったのです。

ここに、ザアカイの孤独が現れています。しかしこれは単に、ザアカイが可哀想というこ

とでもありません。恐らく彼は、ローマ帝国の権力を笠に、同胞から税金を多く取り立てて、私腹を肥やしていました。だから嫌われていたし、金持ちだったのです。周りの人々は、彼を憎しみと嫌悪の眼差しで見つめていたし、ザアカイも周りの人々を金蔓としか思っていなかったかも知れない。その代わり、冷たくされたり、嫌われたりしていることも、十分に承知していたでしょう。嫌われ者の自分を冷めた目で見て、開き直っていたかも知れない。

しかし、そこにザアカイは、徴税人とも親しく交わるイエスさまの噂を聞いたのです。

彼は恐らく、自分も弟子になりたいとか、食事を一緒にしたいとか、そんな風には考えもしなかったのではないのでしょうか。とにかく、どんな人か見てみたかった。

でも本当は、それは心の奥底の叫びだったのかも知れません。ザアカイ自身も気付いていないような、孤独や、寂しさや、心の傷。そして周りの人々への怒りのようなものが、イエスさまを求めさせたのかも知れません。

とにかく、とつてもイエスという人物に興味があった。群衆に遮られたザアカイは、イエスさまの先回りをして、いちじく桑の木に登って、その木の上からでも、お姿を一目見ようとするほどでした。なぜか滑稽なほどに必死です。それほど、イエスさまに無関心ではいらなかった。彼の心は必死にイエスさまを求めていたのです。

<イエスさまから>

ところが、ザアカイにとって驚くべきことが起こりました。5節にはこうあります。イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」

イエスさまは、ザアカイの名前をご存じでした。ザアカイがいちじく桑の木の上にいることをご存じでした。そして、イエスさまはザアカイにその眼差しを向け、語りかけられたのです。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」

「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」。これは、新しい聖書協会共同訳聖書では、「今日は、あなたの家に泊ることにしている」と訳されていました。

ここには、泊まりたい、～したい、という願望ではなく、～しなければならない、という強い意志、必然を示す言葉が使われています。イエスさまは、「今日、わたしはあなたの家に泊らなければならない。泊まる必要があるのだ。」と言われたのです。

イエスさまは、ザアカイのところに、宿られる必要があったのです。ザアカイのところへ、行かなければならなかったのです。それは、彼との関係を築くためです。彼を神さまのご支配へと招くためです。

イエスさまは、徴税人で金持ちのザアカイを、罪人を、ご自分の懐を開いて、そのまま受け止めて下さいます。そのままの彼を認め、名を呼ばれます。そして、ザアカイにも、イエスさまを受け入れることを、求められるのです。「わたしはあなたのところに、宿らなければならない。」

ザアカイは、いちじく桑の木から急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた、とあります。

この時ザアカイは、群衆の中から自分を見出し、自分の名前を知っておられ、声をかけて下さったイエスさまに、自分はすべて知られている、ということを知ったのではないのでしょうか。

自分の名前を、自分の存在を、自分の罪を、感じている孤独を、怒りを、そして救いを求める心を。この方はすべてご存じでいて下さり、今自分の名前を呼んで、御許へと招いて下さっている。すべて知られている。すべて受け入れられている。

この神の御子の眼差しに受け止められながら、ザアカイは、イエスさまを喜んで迎えたのです。この「迎える」というのは、単に家に迎えて宿を貸した、という意味ではありません。この迎えるは、受け入れる、という言葉です。イエスさまを受け入れた。神の国を受け入れた。そして、イエスさまと共に生きる、新しい生き方を受け入れたのです。

<新しい生き方>

しかし7節には、これを見た周りの人は、ぶつぶつと呟いた、とあります。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった。」

徴税人の家に泊るなど、自分にも罪の汚れが移り、罪人の仲間になってしまうことと同じです。イエスさまのなされたことは、人々の常識では、とても信じられないことなのです。

ところが、このつぶやきの中で、ザアカイは立ち上がって、主に言った、とあります。彼は、自分の主人となって下さったイエスさまに言いました。彼の主人は、もうローマ帝国でも、お金でもありません。イエスさまです。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」

このザアカイの表明は、こうするから救って下さい、これだけのことをするから、これまでのことを許してください、と言っているものではありません。

ザアカイは、まずそのまま、イエスさまに受け入れられたのです。罪人のままで、罪を赦され、神さまとの交わりに与り、救われたのです。

その上でザアカイは、イエスさまに受け入れられたものとして、イエスさまを主人とする者として、イエスさまを喜んで受け入れた者として、このように生きたいと願ったのです。

たった今、隣で自分のことを「罪深い男」と蔑んだ人々と、その人々から税金を搾り取っていた自分との関係も、ザアカイは今日から、新しい誠実なものに変えていきたいと、イエスさまの許で、願うことが出来たのです。

イエスさまとの喜びの出会いが、罪人を新しく造り変えます。

神さまとの交わりに生きる喜びが、目を留められ、名を呼ばれ、受け入れられている喜びが、その人を新しい命に生かします。救いの喜びが、人を新しくするのです。

ザアカイは、またわたしたちは、自分で自分を新しくしたり、自分で本当に根本から生き方を変えることは出来ません。人の決意は揺らぎますし、何か起きればすぐに心は折れてしまいます。わたしたちは根っこから罪に捕らわれており、いつでも自己中心の思いが頭をもたげ、損得を考えて、自分の安全を自分で守って、生きようとしてしまうのです。

でも、罪に捕らわれたわたしたちを、何も出来ないわたしたちを、神の御子イエスさまは、罪から解放し、救い出し、新しくすることがお出来になります。わたしたちの罪を贖い、新しい命を与えることがお出来になります。まさにそのために、イエスさまは十字架に架かられ、また死者の中から復活なされるのです。

最初にも示しましたが、18章24節で、イエスさまはこう言われました。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」これを聞いた人々は「それでは、だれが救われるのだろうか」と言いました。その後、イエスさまはこう言われたのです。「人間にはできないことも、神にはできる。」

そうです。人間にはできないことも、神にはできる。神さまは、罪人であるわたしたちを救い出し、新しくし、喜びに生きる者とするのが、神の国に生きる者とするのが、お出来になるのです。

徴税人の頭であり、金持ちであり、神の国に入るのが最も困難と思われたザアカイでさえ、イエスさまは救うことがお出来になるのです。人はただ、乳飲み子のように救いを求め、ただ乳飲み子のように、神さまから与えられる恵みを受け取るだけです。しかし、そのような者こそが、神の国に、救いの中に、入れられるのです。

<喜んで迎える>

わたしたちもまた、イエスさまに名を呼ばれ、見つめられ、受け入れられています。そして、あなたのもとに宿りたい。宿らなければならない。だから、あなたもわたしを受け入れなさい。そう、語りかけられています。

そして、わたしたちの新しい生き方。損得勘定ではなく、イエスさまに従う生き方。神さまを愛し、隣人を愛する生き方。それは、イエスさまを受け入れ、共に生きる者とされた喜びから、生まれてくるのです。

その生き方は、世の中の現実的には、とても困難で、苦しい生き方なのかも知れません。しかし、神さまが共にいて下さる喜びが根底にあり、神さまがわたしたちを変えて下さることがお出来になる。そう知っているなら、わたしたちはきっと、必要なその力を、忍耐力を、勇気を、愛を、神さまからいただけるに違いありません。

イエスさまは言われました。「今日、救いがこの家を訪れた。」

ザアカイを訪れたのはイエスさまです。イエスさまが、わたしたちを訪れて下さいます。わたしたちのすべてをご存知のイエスさまが、名前を呼び、眼差しを注ぎ、親しい交わりへと招いて下さいます。イエスさまが、わたしたちに救いを実現して下さいます。

イエスさまは、今日の最後の 10 節で、ご自分のことを「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである」と言われました。

ルカ福音書の 15 章には、失われた一匹の羊、失われた一枚の銀貨、失われた息子たちのたとえがありました。これらは、失われたものを、神さまがどこまでも捜し求め、見出し、そして取り戻されたなら、大いに喜ばれる、ということを示していました。

まさに、そのために遣わされたのが。罪人のザアカイを、わたしたちを、捜し求め、見出し、取り戻して下さったのが。このお方、神の御子、イエスさまなのです。

このお方は、一人の罪人を捜し出し、救い出すために、ご自分の命をも惜しまず捨てて下さるお方です。そして、一人の罪人が神さまの御許に立ち返ったなら、一人の罪人が救われたなら、天をあげての大宴会が開かれるほどの、大きな喜びが神さまにあるのです。

わたしたち一人一人の存在は、この神さまの大いなる喜びの許にあります。

そして、この神さまを知ること。この神さまとの親しい交わりに生かされることは、わたしたちにとっても、最大、最高の喜びなのです。

わたしたちも、捜し求められ、見出され、名前を呼ばれています。その眼差しが注がれています。わたしのために、十字架の死と復活への道を歩まれるイエスさまが、「今日、あなたのもとに、泊まらなければならない。」そう言って、わたしたちの内に受け入れられることを、わたしたちが、イエスさまの救いを受け入れることを、求めておられます。

わたしたちも、急いでこの方の御許へ行き、喜んでこの方を迎えたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

イエスさまが、わたしたちのところに宿らなければならないと、わたしたちを捜し出し、見つけ、名前を呼び、招いて下さいました。どうか、わたしたちも急いで、喜んで、イエスさまをお迎えする者とならせて下さい。

イエスさまが共にいて下さる喜びが、わたしたちを新しくして下さいます。

わたしたちも、主に受け入れられ、主と共にある喜びに支えられて、神さまの御心に合った歩みをすることが出来ますように。

また、一人でも多くの者が、イエスさまに自分が知られていることを知り、イエスさまを喜んで迎えることが出来ますように。

主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン